

北海道内を北上中、種形容語に幕末の動乱を背負う
水田の問題雑草イボクサ

森田 弘彦

イボクサ (*Murdannia keisak* Hand.-Mazz. 図-1) は、イネの生産者が防除に苦勞する水田の一年生広葉雑草のひとつになった。2020年の関東地方では5県で「問題となっている雑草」とされ、うち4県で「近年増加傾向」と認識され(植調関東支部 関東支部報告資料 2020年度, 2021), 2014年の東北地方では、イネの作付面積に対する発生面積の比率が宮城県で5%, 秋田県で4%とされ、さらに青森県や山形県の一部地域で問題視された(日植調東北支部 同協会東北支部会報 50号 2015)。また、九州地方では宮崎県で2014年に4%の発生面積比率で問題視し(鎌田 九州の雑草 45, 2015), 長崎県では2018年に1.5%と推計されたものの問題雑草としては特記されていない(下山 九州の雑草 49, 2019)。

坂庭清一郎氏の「雑草, 1900」で「水田に生ずる雑草」に含められ、「水田, 沼澤の附近に族生する(東京博物学研究会編 野外植物の研究, 1907)」、「池溝水田等に生じ(小笠原 實用新案 普通植物圖解, 1909)」と解説されて、水田に生える雑草としてのイボクサは明治の末期にはすでによく知られていた。水稲用除草剤の普及初期においても、笠原安夫先生は「水田の主なる雑草(笠原・淵野 雑草と2,4-D, 1949)」に、また、竹松哲夫先生は「(2,4-Dで)除去可能で発生量大なる雑草(2,4-Dと水田畑地の雑草防除法, 1952)」のひとつに挙げて図示され、また「農業技術教育研

究会編 農業技術図解集(作物篇), 1953」にも2,4-D剤に弱い水田雑草として図示された。

このように一定の知名度を持っていたイボクサが水田で害の大きい雑草として特に注目されだしたのは、「イボクサ(*Murdannia keisak* (Hassk.) Hand.-Mazz.)の発芽特性と除草剤に対する感受性(佐合ほか 雑草研究 41, 1996)」や「水稲早期栽培でのイボクサの発生生態と防除(北野 植調 33(2), 1999)」などの研究論文が公表された時期であった。

2019年の秋、植調協会の水稲関係除草剤適用性試験の北海道地域成績検討会終了後の、問題雑草の情報交換の場で「北空知地方の水田にイボクサが入った」との話題があった。北海道でのイボクサについて、原松次先生は1976年に登別市で撮影した写真に「道内では空知以南のようである。(北海道植物図鑑 上, 1981)」と解説された。道南では、「畦畔に生ず。(渡島), (北海道に於ける水田雑草, 1931)」や「上磯(山本・塚本 函館植物志, 1932)」に、道央の札幌市では「(円山の)北側にムラサキシキブ, 池畔にイボクサ, ・(井上 札幌を中心としたる植物採集, 1938)」とあり、上記の原先生の記述を経て、「諸資料分布地域及び北大資料: 空知, 石狩, 後志, 日高, 胆振, 桧山, 渡島。(合田 北海道植物誌, 2004)」とされていたので、上川地方に迫る北空知地方でのイボクサは近年確認された分布の北上と言える。なお、原先生は「道内ではまだ花を見ていない。開花するかどうか不明。」と記された(上記, 1981)。牧野富太郎博士が1905年にすでに「閉鎖花ヲ生ズル本邦植物」にイボクサを含めている(植物分類研究 下, 1936)ので、北海道でのイボクサの開花・繁殖を含めた生態の解明を期待したい。

一発処理除草剤の主成分として、効果の不十分なスルホニルウレア剤に、十分に効果を示す新たな成分が加わったことから、イネの移植栽培ではイボクサ制御の目途がたってきたが、除草剤の使用場面の限定されがちな直播栽培ではしばしば問題となる(図-1D, 図-2)。直播栽培でのイボクサの発生の特徴と防除方策については、「川名 水稲湛水直播栽培で近年問題となる雑草とその防除法, 水稲直播研究会誌 43, 2020」および「大段 水稲乾田直播栽培で近年問題となる雑草とその防除法, 同上」を参照していただきたい。

和名の「イボクサ」は、おそらく誰が考えても「疣草」と書くのであろうが、なぜ疣が関わるのかは牧野先生も困惑された(植物集説 上, 1935)。

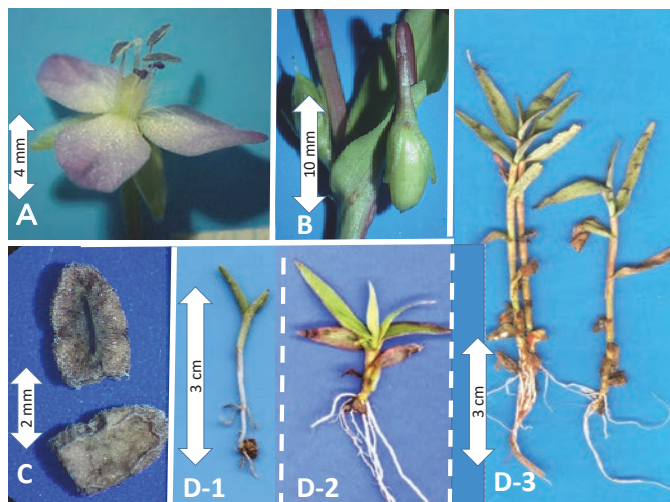


図-1 イボクサの生育各期の状態

A: 花, B: 未熟な果実, C: 種子,
D: 種子から発生した幼植物 (-1: 畑水分土壌, -2: V溝直播水田, -3: 湛水土壌中直播水田)

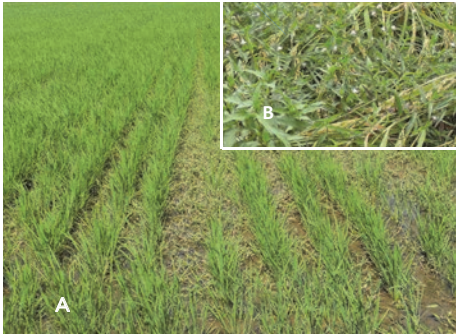


図-2 イボクサの多発した水田
A：分げつ期のイネ条間で繁茂・秋田県南部、
B：乾田直播水田で成熟期のイネに斜上・茨城県西部

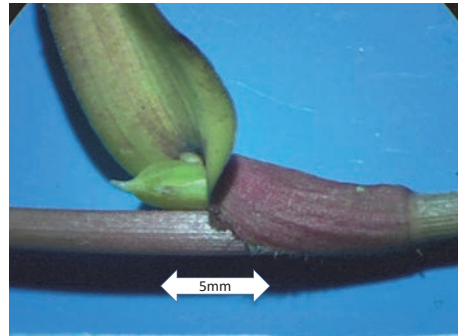


図-3 和名の原型：葉鞘内部で結実し、「メイボ（眼病のモノモライ）」を思わせるイボクサの果実

草木落子葉籠（ソノハ）

疣取り醫者イラズ：・・・つゆくさ科ノ野外湿地生ノ一年草ニいぼくさと云フ者ガアルガ今之レヲ其名カラ見テ或ハ疣取りニ為ハセヌカト、書イタモノヲ捜シテモ其事ハ見當ラナイ（身体ノ水氣ガ引クカラみずひきダノ、痛ミガトレルカラいたどりダノト云ウフヤウニ近頃ノ人がヨイ加減ヲ想像デ軽々に書イタモノハ別トシテ）是レハ或ハ其橢圓形ヲ成セル實ヲ疣ニ見立テタ和名カモ知レナイト思フイボクサの和名から「疣取り」の薬効を期待する方は近年にもいらして、新潟県で以下の経験が語られた（新潟日報社編 にいがた・山野植物ノート、1978）。

ツユクサ科の水っぽい草だ。部落の○○○○老が「ツルナギって草は、やっこい草だども、どこまでも向こうへ伸びていっちゃう。行った先からまた根を出してはびこって、悪い草だ」といっているようにツルナギの方言名がある。（中略）

「和名ハ此草疣（いぼ）ニ伝フレバ之ヲ去ルト云フヨリ名ク、故ニイボトリグサト云フ」と牧野日本植物図鑑にあるが、私も何年来、右手にイボがいくつもできて見苦しいので、この草の汁をつけてみたが効果はなかった。そして最近いつの間にか、イボは自然になくなっていった。

イボクサの名は江戸時代から使われており、幕末の著名な本草学者小野蘭山は「重訂 本草綱目啓蒙、1803 頃（復刻 日本科学古典全書 9 1978）」で次のように述べた。

〔註〕水葉竹 イボグサ メイボグサ 越前 イボトリグサ 同上水草なり、溝瀆及池澤邊に多し、圓莖地にひく、葉は鴨跖（あおばな）草葉より細長節に互生す。莖葉ともに黄綠色、夏月枝梢ごとに一花をひらく、三辨にして淡紫色澤瀉（さしをもたか）の花に似たり、大き二分許。

北陸地方の越前での「メイボグサ」の「メイボ」は、「（目疣の意）麦粒腫。ものもらい。鳥取・徳島県祖谷地方・高知・大分。（東條編 全国方言辞典、1978 版）」だそうで、「葉鞘に包まれてブククリした果実（図-3）をものもらいに見立てた」のが和名の原型と思う。

学名の種形容語である keisak については、牧野先生も 1910 年の記事で困惑された（植物集説 上、1925）。

植物評記（三）：水傍ニ生ズル一年生草本ニシテ往々閉花ヲ生ズ本種の学名ヲ *Aneilema Keisak* Hassk. ト云フ、其種名ナルハ元来日本

名ナルガ或ハ慶作トデモ言フベキ人名ヨリ出デシカ、今之ヲ明カニスルコト能ハズ

植物学者の桧山庫三先生は、前川文夫先生の説（出典不詳）に同意して、愛媛県出身の幕末の蘭学者でシーボルト事件に連座した「二宮敬作」について以下のように記した（野草 18-1, 18-3, 1952）。

ボタニカル ノート（12）：107. Keisak と Otaksa

イボクサの学名の示種名 Keisak は二宮敬作であろうとの説は成程と思う。（中略）尚二宮敬作と云えばシーボルトが日本を追われて帰国する時に其扇とおいねを小舟に乗せて彼女らを蘭船上の S 氏との袂別の機会を作ったあの敬作である。（後略）

ボタニカル ノート（14）：121. 再び Keisak について

Keisak (*A. japonica* の異名) の Keisak は草名でなく人名で二宮敬作のことであろうと前川文夫氏が云われたことについて前に一寸書いておいたが、これについて Sieb. et Zucc. の日本植物志に二宮敬作を Kesak と記しているのに気づいたから追記する。Keisak と Kesak 同じ人と見るに少しも差支はない。S 氏はトサミズキとヒウガミズキの條下に、他にわが忠実なる弟子の Kesak 氏が葉形や果実の大変異なった九州の高山に野生する第三の種を見つけ出して来た。われわれはこの熱心なる植物学者の名を記念してこの植物を *Corylus kesakii* と命ずることができようとしている。S 氏がこのような書き方をする門人の Kesak は二宮敬作以外には考えられない。（後略）

シーボルトが日本から持ち帰った植物標本類を、オランダの国立植物標本館で詳細に調べた熊本大学理学部の山口隆男氏は、その中に「門人の二宮敬作から貰った標本」が 3 点あり、そのうち一つには「Kesak」とのシーボルトの筆跡があると指摘した（シーボルトはどのようにして植物標本を収集したのか CALANUS 特別号 5, 2003）。そうだとすると、1870 年にイボクサをツユクサ科の *Aneilema* 属に位置付けて *A. keisak* の学名を定めたドイツの植物学者 J. C. Hasskarl は「敬作」のスペルをどこから得たのであろうか？

「イボクサは（中略）、一晩のうちにどんどん伸びて田んぼに入りこむところから、夜這いになぞらえてヨバイグサ、またはヨベグサといわれております。伸びすぎなければちよつと観葉植物にもなるところです（更級 水戸市の動植物方言、1986）」の程度でおとなしくして欲しい。